

アカ語アルー村方言の音素

桂 満 希 郎

は じ め に

本稿は、私が約1年をかけてタイ国北部で行なったアカ語の現地調査の一部を整理したものである。この現地調査を行なうに当って、タイおよび日本両国の色々な機関から多大な協力を受けた。これらの協力・援助がなかったならば、私の調査は決して行なうことができなかったであろう。中でも、次にあげる諸機関に対しては、特に感謝の意を表したい。

(タイ国) National Research Council of Thailand; Division of Hill Tribe Welfare, Department of Public Welfare, Ministry of Interior; Chiengrai Hill Tribe Welfare Settlement; Provincial Office of Chiengrai; District Office of Maechan; Faculty of Arts, Chulalongkorn University.

(日本国) 京都大学東南アジア研究センター; 同バンコック連絡事務所; 京都大学文学部, 言語学研究室。

ここにあげられてはいないが、私の全調査を通じて協力・援助をおしめなかった多くの人達に対しても、深く感謝する旨を記しておく。特に、私が調査地として選り滞在していた村の人達に対して、深く感謝の意を表したい。

本調査の目的はアカ語の文法構造を記述することにあるが、本稿においては、その音素体系のみを取りあげ、形態論、シンタックス等については後の機会に述べることにする。それ故、本稿はこの現地調査で得た資料のごく一部を整理したものにとすぎず、いわば中間報告であるから後に相当な訂正、追加が加えられるであろうことを付記しておきたい。なお、本稿に現れる地名に関しては、地図を見ていただきたい。

0 アカ族およびアカ語について

0.1. タイ国においては、いわゆるタイ系の諸民族

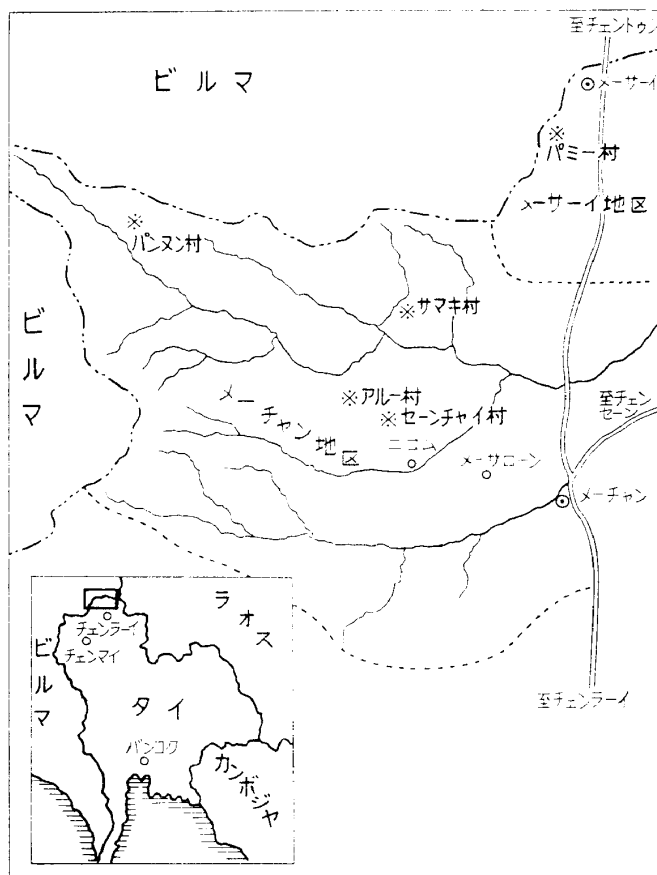
以外に、色々な民族が居住する。中国人、インド人を一応除外して考えると、(1) タイ系、(2) チベット・ビルマ系、(3) モン・クメール系、(4) カレン系、(5) メオ・ヤオ系となるだろう。これらのうちで(2)のチベット・ビルマ系に属する言語として、アカ語、ラフ・ナ語、ラフ・ニ語、ラフ・シ語、リス語、ビス語などの言語が話されている。これらは、Robert Shafer の分類によると、いずれも Burmish-Loloish Group に属しており、ビルマ語とは近い関係にあると考えられている。そして、これらの言語を話す人達は、タイ国では、主として北部の山岳地帯に住んでおり、生活の基礎として焼畑農業を行なっている。アカ族はタイ国以外にも、中国の雲南省、ビルマのシャン州、北ラオスなどにも居住し、タイ国におけるアカ族は、そう遠くない過去に、ビルマから移住したものだと思われる。タイ国での彼らの居住地域は極めて限られており、現在のところ、チェンライ県の北端部に位置するメーサーイ、メーチャン、チェンセーン、メースオイの4つの地区のみである。最後のメースオイ地区のアカ族はごく最近に一私の調査中にメーサーイ地区から少数が移住したものであり、これがアカ族の分布の南限を成すものであろう。タイ国におけるアカ族の人口は、Gordon Young によれば、約25,200人とされているが、この統計に含まれていない村も多少はあると思われるので、実際の数はこれを少し上まわるであろう。ビルマのシャン州—チェントウンを中心とする一には40,000人強、中国の雲南省に約48,700人、北ラオ

1) カレン諸語の系統については、まだ一致した意見がないので、ここでは仮りに「カレン系」として別個に取りあげておく。

2) 三谷恭之「ラフ語の現地調査」『東南アジア研究』(1965), 第3巻第1号, pp. 150~153. および三谷恭之「カメート語音素体系の記述と比較言語学的考察」『東南アジア研究』(1965), 第3巻第3号, 参照

3) Robert Shafer, "Classification of the Sino-Tibetan Languages," *Word*. (1949), Vol. V, pp. 94~111.

4) Gordon Young, *The Hill Tribes of Northern Thailand*. (Bangkok: The Siam Society, 1962)



この地図は Lucien M. Hanks et al., *A Report on Tribal Peoples in Chiangrai Province North of the Mae Kok River*, Bennington-Cornell Anthropological Survey of Hill Tribes in Thailand. (Bangkok: The Siam Society. 1964) より引用したものである。

スに約4,500人が居住するといわれている⁵⁾。しかし、アカ族は非常に交通の便の悪い奥地を好んで居住地とするので、精確な数は未だ不明なのではないかと思う。

アカ族がタイ国内に移り住んだのは大体20年くらい前のことだといわれている⁶⁾が、その移住の流れは現在でも依然として続いており、私の知り合いの中にも、最近ビルマから来たのだという者がかなりある。また、私の滞在中にも、少人数のグループで国境を越えて入って来るものも相当あった。しかし、タイ国内に居を定めても、時をみては、国境を越えて血縁者を訪ねたり訪ねられたりしている様である。この事に直接の原因があるかどうかは解らないが、アカ族がタイ国北端の国境地帯を離れて更に南下する様な傾向は、少くとも現在のところは、見られない。

0.2. アカ語は、ラフ語がラフ・ニ語、ラフ・ナ語と分けられている様には、分類してよばれることなく、どこにおいてもただ「アカ語」といわれるだけであって単一の言語の様に思われ勝ちであるが、実際に現地で調査してみると、あるいはこれまでに発表された報告の類一極めてとぼしいが—に目を通してみると、必ずしもそうでないことがわかる。これだけ広い地域で、しかも極めてコミュニケーションの悪いところに住んでいる点を考えれば、同じアカ語といっても、色々なアカ語が存在するのではないかと思う。実際にこれら方言のグループ分けをするとなると、ずっと広範囲にわたってデータを取る必要があるだろう。話をタイ国内だけに限ってみても、一つ村が異なるごとにその言語も少し異なっているといつてよいほどである。私は、主なる調査地として選んだ2つの村以外にも、いくつかの村を歩いて、少量のサンプルを取って見たが、わずか10~20km離れた村同志でも、多少ともその言語は異なっていることがわかった。

実際にこれら方言がどういう相互関係にあるのかという事は今のところ何ともいえないので、本稿で扱うアカ語は、タイ国北部のアルー村で話されている方言というに止める。アルー村は、チェンラーイの街から約55km西北の山地にある。村の人数が約400人であるから、山地民の村としては非常に大きなものだろう。このアルー村より5kmほど下ったところにあるセーンチャイ村のアカ語をも調査したので、これら両方言の相異について、最後の部分で簡単にふれることにする。アカ族はタイ語をほとんどはなすことができない。Border Policeの手になる小学校の存する唯一の村であるセーンチャイ村においてすら、タイ語をまともに使える者は数人しかいないようであった。一般的にいて、平地のタイ人との交渉に際しては、シャン語あるいはシャン語風に変形した北タイ方言を話す。山地民同志の間ではラフ・ナ語がよく通じ、シャン語、雲南の中国語がこれに続く。最近ビルマから来た者の中には、ビルマ語の使える者も相当いる。

アルー村においてはタイ語が一北部方言ですら—

5) Frank M. LeBar et al., *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. (New Haven: HRAF Press, 1964)

6) Bunchuai Sisawat, *Chau Khau nai Thai*. (Bangkok: 1963)

くに通じないので、私はビルマから来たシャン族の青年で、シャン語の他にアカ語、ラフ・ナ語、ビルマ語、英語を話す男を使って調査を進めた。主なるインフォーマントとして協力してくれたのはアパという19才の男子であるが、機会あるごとに他の人達に当ってデータをチェックすると同時に、私自身も出来るだけアカ語で用を果すようにつとめて、自然なデータを得ることに努力した。

アカ語は、多くの少数民族の言語と同様、文字を持たない。ビルマにおいては、キリスト教の宣教師によってローマ字の正書法が考案せられ、聖書なども出版されている様であるが、この正書法を使いこなせるアカ族は人口的にも地域的にも非常に限られているのではないかと思う。タイ国のアカ語については、正書法はもちろなし、今までに言語調査が行なわれたこともない。ビルマ、ラオスのアカ語に関しては、今までにごくわずかな報告が出ている。また雲南省のアカ語は中国の学者によって調査されていることと思うが、私はその事情は十分に知らない。したがって、本報告は、私の現地調査で得られたデータのみに基づくものであって、今までに出された資料、論文の類はいっさい参考にしないものであることを記しておきたい。

1 アカ語アルー村方言の音素

1.1. 概略：この報告で取り扱う最大の言語的単位は音節である。音節と音節との関係、あるいは音節以上の単位については後の機会に述べたいと思う。これは、現地調査で得た資料を整理する場合、まず小さな単位から確実に整理していくべきだと考えるからである。アカ語においては、近い関係にある多くの言語におけると同様に、ひとつの音節は固いまとまりを成し、同時にひとつの形態素である場合が基本的である。それ故、ここでアカ語の音素を説明するに際して、最小の単位として音節を取りあげることは妥当だと考える。音節は音素より成り、アカ語の音素は子音、母音、声調類の3種に分類することができる。以下、これらの各々について、音節という範囲内で説明して行くことにする。

1.2. 音節構造：アカ語の最大の音節構造は、下の様な式で表わすことができる。すなわち、

T

$$Sy = C_1 (C_2) V (C_3)$$

この式において、Sy は音節を、T は声調類を、C は子音音素を、V は母音音素を、それぞれ、代表するものとする。カッコで囲まれた文字は“indispensableでない要素”を、カッコを有しない文字は“indispensableな要素”を表わすものとする。これらの各文字をその表わす各要素で置きかえればアカ語の音節を得ることができる。例えば、 $C_1 = /m/$; $(C_2) = /j/$; $V = /o/$; $T = \text{低降型声調} (/ \wedge / \text{で表わす})$ とすれば、 $Sy = /mjò/$ <サル> という一つの音節を得ることができるのである。この方式にしたがって、アカ語アルー村方言において実際に見られる音節の構造を示し、各々について例をあげる。

$$Sy = \begin{cases} \text{i. } C_1 VT & /sì/ & \text{<血液>} \\ \text{ii. } C_1 C_2 VT & /bjà/ & \text{<ミツパチ>} \\ \text{iii. } C_1 VC_3 T & /màng/ & \text{<ウマ>} \\ \text{iv. } C_1 C_2 VC_3 T & /('a)-bjàng/ & \text{<仲間>} \end{cases}$$

次に音節を構成する各要素について述べて行く。

1.3. 音節初頭子音：ここでいう音節初頭子音とは、1.2.の式における C_1 - あるいは $C_1(C_2)$ - を指すものとする。 C_1 - あるいは $-(C_2)$ - (i. e. $/j/$) に起り得る要素は下の表の通りである。本表からわかる通り、閉鎖音の系列においては、有声：無声の対立の他に、無聲音においては、出気：無気の対立がある。鼻音に関しては、すべて有声音で出気：無気の対立はなく、調音点の違いによってのみ対立を示す。この事は oral continuant についても同様である。摩擦音の系列は、有声：無声の対立があり、出気：無気の対立は存在しない。これらのすべてが、 C_1 - の位置に立ちうるわけであるが、 $-(C_2)$ - に立つものは、先に述べたように、 $/-j-/$ のみである。 $C_1(C_2)$ - の実際に現われる形としては $/pj-, phj-, bj-, mj-/$ のみである。すなわち、 $C_1(C_2)$ - において、 $-(C_2)$ - が満たされた場合には、 C_1 - は必ず両唇音のどれかでなければならないということである。

7) 音節よりも大きな単位を考慮に入れると、例えば stress, juncture, intonation 等の要素をも追加しなければならないだろう。

8) Richard B. Noss, *Thai Reference Grammar*. (Washington, D. C.: Foreign Service Institute, Dept. of State, 1964)

			唇	歯	硬口蓋	軟口蓋	その他
閉鎖音	無声	無気	p	t	c	k	
		出気	ph ⁹⁾	th	ch	kh	
	有声	無気	b	d	j	g	,
鼻音	有声	無気	m	n	ñ	ɲ	
摩擦音	無声	無気		s		x	h
	有声	無気				y	
Oral Continuant	有声	無気		l	j		

初頭子音音素

C₁(C₂)- の位置で各要素が対立する例を示すと下の通りである。¹⁰⁾

/pà-te/	雨合羽	/phá-'ú/	借金する
/bà-ba/	ほほ	/ma-sà/	竹
/pjà-'ú/	ひっかく	/phjà-'ú/	熱がある
/bjà/	ミツパチ	/mjà-'ú/	多い
/ta-'ú/	塩からい	/thà-'ú/	置く
/da-jum/	段ばしご	/nà-ja/	耳飾り
/ba-la/	月	/ca-thòŋ/	へそ
/chá-chà/	小指	/jà-ñi/	ホタル
/ña-'ú/	賢い	/jà/	子供
/ka/	十字弓	/kha-'ú/	落とす
/ga-ma/	道	/gà/	五
/xà-me/	口	/yà/	力
/sà-jí/	肉	/jo-'à/	ぬれた
/ha-khá/	竹かご		

1.4. 音節中核母音：1.2. に示した式において、V の位置を占めることのできる要素を音節中核母音と呼ぶことにする。アルー村方言においては、次の11個の母音音素の対立を認めることができる。舌の位置(前、後および高さ)、唇の形により整理分類すると下の表の通りである。

ここでいう特殊母音 /m/ というのは、音声学的には [m] という子音であるが、音節内での分布を考える時、これを母音と解した方が妥当だと思う。本稿でいう母音・子音というのは、その音自体の性格にもとづいて分類したものではなくて、それが音節の中で占める分布・機能を考えて分類したものであ

		高	中	低	
前舌母音	張唇	i	e	ɛ	
	円唇		ø		
後舌母音	張唇	u	ə	a	
	円唇	u	o	ɔ	
特殊母音					m

中核母音音素

る。/m/ についていえば、これは必ず [m] あるいは [mm] の形で現われるが、その反対に /mV/ の様な形は現われることがない。[m] における [ʔ]、および [mm] における [m] を、それぞれ /ʔ/、/h/ と解釈すれば、[m] は /m/, [mm] は /hm/ として表記することが出来る。これらの形において、/ʔ/ および /h/ を音節初頭子音 C₁ と考えれば /m/ は V の位置に立つことがわかる。アルー村方言においては、母音音素の結合は認められず、母音音素の長短による対立も存在しない。これらの母音音素が対立する例を示すと下の通りである。

/à-li/	男の子供	/ò-lø-ñi/	太っちょ
/le-'ú/	(上方へ)行く	/le/	市場
/lu-dù/	井戸	/lo/	車
/lɔ-bà/	川、流れ	/lá-'ú/	来る
/jo-là/	茶色の	/m/	天、空

1.5. 音節末尾子音：1.2. の式において -(C₃) の位置を占めることのできる要素をいう。アカ語においては、この位置に立つことのできる要素は極めて限られている。アルー村方言に関しては、/m, ɲ, j/ のみが -(C₃) を占めることができ、それ以外の要素がこの位置を占める例は発見できなかった。この言語においては、音節中核母音と音節末尾子音とは切り離すことのできない固いまとまりを成している。それゆえ、これらの結びつきがどのような分布を成しているかを考えることが大切である。下に、アカ語アルー村方言に認められる /-V(C₃)/ の形を表にして示す。上にあげた各

9) /ph, th, ch, kh/ は2つの音素の結合を示すものではなく、hはこれらの音素が出気音であることを示すにすぎない。1文字で表わす方がよいが、ここでは便宜的に h を使用する。

10) ここにおけるハイフンは便宜的に音節の切れ目を示すだけであって、何ら音素的なものではない。

要素のうち /j/ は Maesai を表わすアカ語 /mè-saj/ および Thai を表わす /thàj/ の2例だけであるが、/mè-saj/ という形も同時に並行して使われている。また /-aj/ という形も、この /mè-saj/ および Chiengrai を表わす /ji-haj/ においてのみ認められる。これらの点から、/-aj, -aj/ という形は、この様な固有名詞にのみ現れるものであって、アカ語本来のものではないと考えられる。これらは、表ではカッコで囲まれたものである。この表からもわかる様に、-(C₃) の

-#	-m	-ŋ	-j
-i			
-e			
-ɛ			
-u	-um		
-o			
-ɔ		-ɔŋ	
-a		(-aj)	(-aj)
-ø			
-w	-um		
-ə			
-ɱ			

末尾子音素

位置に立つ要素が非常に少なく、/-m, -ŋ/ の2つだけである。これらの鼻音の分布も非常に限定されたものであるが、これについては後の項で述べる。下に、音節末尾子音が対立する例を示す。

/súm/ 三 /sòŋ/ つめ
/mè-saj/ Maesai /ji-haj/ Chiengrai

最後の /ji-haj/ は北部タイ語の /ciephaaj/ あるいはシャン語の /cephaaj/ から来ていると思われる。

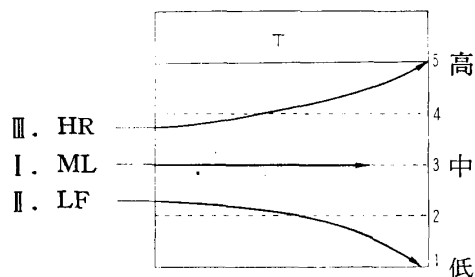
1.6. 声調類：声調類というのは、1.2.の式における文字Tによって表わされる要素のことである。このTと、他のCあるいはVといった要素との違いは、後者が音節という時間的経過において前後関係を有するに対して、前者は音節全体に関係し、他の要素との前後関係に立たない点にある。例えば、/mòŋ/ <馬> (C₁=/m/, V=/ɔ/, C₃=/ŋ/, T=/^/) という音節において、C₁はVよりも前、VはC₃よりも前に立つといった風に前後の関係にあるが、Tは /mòŋ/ という要素の連続全体にわたって存在するものである。C₁, V, C₃ が音節の初頭、中核、末尾という前後関係を成

すに対して、Tは /C₁VC₃/ という連続全体にかぶさったものだといえよう。アカ語の声調類には次の3つの形が認められる。すなわち、

- I. 中平型 (ML)……声調符号をつけない。
- II. 低降型 (LF)……\により表わす。
- III. 高昇型 (HR)……/により表わす。

IIのLF及びIIIのHRにおいては母音の長めを伴ない、IのMLにおけるよりは音節全体が長くのばされる傾向がある。これらの声調類を図によって示すと次の通りである。

下に、これらの声調類が対立する例を示す。



- I. ML /ba-la/ 月
III. HR /lá-'w/ 来る
II. LF /là/ 疑問助辞

1.7. 音素の分布における限定：アルー村方言において実際に発見せられた音節を示すと次の表のようになる。これらの他にも存在しうるわけであるが、この表では私のフィールドノートに実例の見られるもののみをあげる。また、本表では声調類は省略し、C₁(C₂)V(C₃)の形のみを示してあるので、実際数はこれよりずっと多くなるだろう。例えば、/ɱ/ という形には /ɱ/ <成す, 作る>, /ɱ/ <天, 空> というふたつの形がありうるが、ここでは声調類は略し、/ɱ/ という形のみをあげる。

1.2.にあげた C₁(C₂)V(C₃) という構造の範囲内にあるかぎり、理論的には、どのような構造の音節でも存在しうるわけであるが、実際には各要素の結合あるいは分布の仕方には、ある程度の限定がある。この表および今までに述べて来た点からも、自ずと解ることだと思うが、この音素分布における限定をまとめると

次の様になる。すなわち、C₁(C₂)V(C₃)において、
(1) -(C₂)- が /j/ により満たされた際には、C₁-は

C₁ (C₂) V (C₃)

-V(C ₃) C ₁ (C ₂)-	-i	-e	-ε	-u	-o	-ɔ	-a	-ɔ	-u	-ə	-m	-um	-um	-ɔŋ	-aŋ	-aj
p-			○	○	○	○	○									
ph-	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○		
b-	○		○	○	○	○	○	○	○	○				○		
m-	○	○	○	○		○	○		○	○				○		
pj-							○									
phj-				○		○	○									
bj-		○				○	○							○		
mj-		○			○	○	○							○		
t-	○		○		○	○	○			○						
th-	○		○	○	○	○	○	○						○		○
d-	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○	○	○		
n-		○	○			○	○	○	○			○		○		
l-	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○		○		
c-	○		○	○	○		○	○	○	○						
ch-	○	○	○	○	○	○	○	○		○						
j-	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		○		
ñ-	○		○	○	○	○	○	○				○				
j-			○	○	○	○	○	○	○	○		○		○		
k-	○				○	○	○									
kh-				○		○	○		○			○		○		
g-				○	○	○	○		○					○		
ŋ-		○	○				○	○								
x-			○		○	○	○	○				○		○		
y-					○	○	○	○	○					○		
s-	○		○	○		○	○		○	○		○		○	○	○
h-			○	○	○	○	○	○	○		○			○	○	
ʼ-	○		○	○	○	○	○	○	○		○			○		

両唇子音 /p, ph, b, m/ のいずれかでなければならない。/mjò/ <サル>

(2) -(C₂)- が /j/ によって満たされた際には、-V- は /u, o, ɔ, e, a/ のいずれかである。

/bjà/ <ミツパチ>, /'a-bjɔŋ/ <仲間>

(3) -V- が /m/ である場合は、C₁- は /, h/ のいずれかでなければならない。

/cà-hm/ <髪の手>, /m̃/ <天, 空>

(4) -V- が /m/ である場合は、-(C₃) が満たされることはない。

/m̃-ú/ <成す, 作る> /'à-hm/ <毛>

(5) -(C₃) が /m/ で満たされた際には、-V- は /u, w/ のいずれかでなければならない。

/súm/ <三>, /m̃-dúm-ú/ <曇っている>

(6) -(C₃) が /ŋ/ で満たされた場合には、-V- は /a, ɔ/ のいずれかでなければならない。/gòŋ/ <槍>、

/ji-haŋ/ <Chiengrai>, /mè-saŋ/ <Maesai>

(7) -(C₂)- は必ず /j/ でなければならない。

/mjò/ <物, 事>

(8) -(C₃) は必ず /m, ŋ, j/ のいずれかでなければならない。/súm/ <三>, /mòŋ/ <馬>、

/mè-saŋ/ <Maesai>

(9) -V- が /i/ である際には、C₁- が /n/ で満たされることはない。/ñi/ <二> に対して /ni/ という様な形は認められない。しかし、/ñe-ú/ <捕える>, /nè/ <精霊> と言った様な例から、/ñ/ と /n/ とは相補的分布を成さないことがわかり、別の音素とみなすべきであろう。

1.8. 各音素の音声学的説明：1.1. から 1.7. に至って、アカ語アルー村方言の音節構造及び音節という範囲内での各要素の分布の仕方について述べて来たわけであるが、ここではこれらの各要素が実際にどのような音声として実現するかという点について説明する。いいかえれば、1.7. までは音節とそれを構成する要素、すなわち音素、について述べて来たわけであるが、本項ではこれらの音素が音声学的にどのようなものであるかという点を扱うことにする。各音素について、その音素の置かれた環境（すなわち、その音素の占める位置）、同音素の音声学的な定義・説明という順序で説明し、最後に例をあげることにする。

1.8.1. 両唇子音

(1) /p/：音節初頭においては、無声無気の両唇閉鎖音 [p]。/-jɔ, -ja/ においては軟口蓋化されて [pʲ] となる。/pà-jɔ/ <煙草>, /pja-ú/ <ひっかく>

(2) /ph/：音節初頭においては、無声出気の両唇閉鎖音 [pʰ]。/-jɔ, -ja/ においては軟口蓋化されて [pʲʰ] となる。常に強い出気をともなう。/phá-ú/ <借金する>, /phjà-ú/ <熱がある>

(3) /b/：音節初頭では、有声無気の両唇閉鎖音 [b]。/-jɔ, -ja/ においては軟口蓋化されて [bʲ] となる。/bò-ú/ <吸う>, /bjɔ-ú/ <楽しく感ずる>

(4) /m/：音節初頭では、有声無気の両唇鼻音 [m]。/-jɔ, -ja/ においては、口蓋化されて [mʲ] となる。音節末尾においては、無声化されて [m̥] となる傾向があると同時に、閉鎖がやや不完全となる。/mù-ú/ <良い>, /mjà-ú/ <多い>, /júm/ <家>

1.8.2. 歯子音

(1) /t/：音節初頭にのみ現れる。無声無気の閉鎖音 [t]。/ta-ú/ <塩からい>

(2) /th/：音節初頭にのみ現れる。無声出気の閉鎖音 [tʰ]。常に非常に強い出気をともなう。/thò-ú/ <さし示す>

(3) /d/：音節初頭にのみ現れる。有声無気の閉鎖音 [d]。/dó-ú/ <吸う, 飲む>

(4) /n/：音節初頭にのみ現れる。有声無声の鼻音 [n]。/ná-ú/ <痛む>

(5) /s/：音節初頭にのみ現れる。無声無気の摩擦音 [s]。/-i, -ø/ においては口蓋化されて [ç] となる。/sà-jí/ <肉>, /sí-ú/ <死ぬ>

(6) /l/：音節初頭にのみ現れる。有声無気の側音 [l]。/-i, -ø/ においては、弱い口蓋化をともなう。/lá-ú/ <来る>, /'à-li/ <男の子供>

1.8.3. 硬口蓋子音

(1) /c/：音節初頭にのみ現れる。無声無気の閉鎖音 [ç]。/cà-hm/ <髪の手>

(2) /ch/：音節初頭にのみ現れる。無声出気の閉鎖音 [çʰ]。閉鎖の程度は /c/ の場合より不完全である。/'ù-chó/ <頭飾り>

(3) /j/：音節初頭にのみ現れる。有声無気の閉鎖音 [j]。/ch/ の場合と同様に、閉鎖は不完全である。/ch, j/ は音声学的には破擦音ともいえるが、/p, ph, b, m/：/k, kh, g, ŋ/：/c, —, —, ñ/ という関係を考える時、この /ch, j/ をダッシュの部分を満たす

べきものとするのが妥当である。故に、音素論的には閉鎖音の系列に入れる。/jà-’ú/ <食べる>

(4) /ñ/ : 音節初頭にのみ現れる。有声無気の鼻音 [ɲ]。/ñi/ <二>, /ña-’ú/ <賢い>

(5) /j/ : 音節初頭においては、有声無気の半母音 [j]。音節末尾においては [ë] となる。/jà/ <子供>, /mè-saj/ <Maesai>

1.8.4. ㇿ 蓋子音

(1) /k/ : 音節初頭にのみ現れる。無声無気の閉鎖音 [k]。/ka/ <十字弓>

(2) /kh/ : 音節初頭にのみ現れる。無声出気の閉鎖音 [kʰ]。常に非常に強い出氣をとる。/kha-’ú/ <落とす>

(3) /g/ : 音節初頭にのみ現れる。有声無気の閉鎖音 [g]。/ga-ma/ <道>

(4) /ŋ/ : 音節初頭においては、有声無気の鼻音 [ŋ]。音節末尾においては、閉鎖は極めて不完全で、前の母音を鼻母音化する。例えば /səŋ/ <つめ> は [sɔ̃ːŋ] の様に発音される。/gà/ <魚>, /məŋ/ <馬>, /ji-haŋ/ <Chiengrai>

(5) /x/ : 音節初頭にのみ現れる。無声無気の摩擦音 [x]。/xà-là/ <トラ>, /ba-xo/ <皮>

(6) /ɣ/ : 音節初頭にのみ現れる。有声無気の摩擦音 [ɣ]。/ɣà/ <力>, /ɣə/ <九>

1.8.5. その他の子音

(1) /ʔ/ : 音節初頭にのみ現れる。声門閉鎖よりもずっと弱い、声門の緊張とでもいうべきものである。¹¹⁾ /ə/ <四>

(2) /h/ : 音節初頭にのみ現れる。無声無気の声門摩擦音 [h]。/hù-’ú/ <大きい>

1.8.6. 母音

(1) /i/ : 前高の張唇母音 [i]。¹²⁾ /x-/ においては無声化する傾向がある。/í-’ú/ <下方へ行く>

(2) /e/ : 前中の張唇母音 [e]。/c-, ch-, j-, ñ-, j-/ においては、他の場合より幾分せまくなる。/le-’ú/ <上方へ行く>, /che-xù/ <ランプ>

(3) /ɛ/ : 前低の張唇母音 [ɛ]。/lɛ/ <市場>, /ñɛ-’ú/ <捕える>

(4) /ø/ : 前中の円唇母音 [ø]。/x-, ɣ-/ においては [oø] となる。/jà-chó/ <あまい>, /xə-’ú/ <ぬすむ>, /ɣə/ <九>

(5) /u/ : 後高の円唇母音 [u]。/m-/ においては

[ũ] となる。/phu/ <村>, /súm/ <三>

(6) /o/ : 後中の円唇母音 [o]。/do-mi/ <尻尾>, /ù-xo/ <帽子>

(7) /ɔ/ : 後低の円唇母音 [ɔ]。/ŋ/ においては鼻母音化されて [ɔ̃] となり、唇の円めはその他の場合より不完全である。/hɔ-’ú/ <見る>, /məŋ/ <馬>

(8) /a/ : 後低の張唇母音 [a]。/p-/ においては鼻母音化されて [ã] となる。/xà-là-na/ <黒ヒョウ>, /mè-saŋ/ <Maesai>

(9) /u/ : 高の張唇母音 [u]。/m-/ においては鼻母音化されて [ũ] となる。/jɔ-sù/ <新しい>, /dùm/ <(うすい物を数える際の類別詞)>, /m-dùm-’ú/ <曇っている>

(10) /ə/ : 後中の張唇母音 [ə]。/sə/ <歯>, /hə-já/ <柱>

(11) /m/ : 音声学的には、これは子音に入れるべきものであるが、音節における分布を考えて、音素論的には母音とみなすことができる。すなわち、この /m/ という要素は必ず [m] あるいは [ɱm] の形で実現する。これら二つの形における [ɱ] 及び [ɱ] を、それぞれ、/ɱ/ 及び /h/ として現すと [m] は /m/ とみなすことができる。この /ɱ/ と /h/ とを音節初頭子音 C₁ と考えれば /m/ は V、すなわち音節中核母音と考えることができる。例えば、/m/ <天、空> という音節を分解すると、C₁=/ɱ/, V=/m/, T=/-/ という風になる。/cà-hm/ <髪の毛>, /ju-m/ <今>

1.8.7. 声調類

(1) /声調符号なし/ : 中平型の声調 [33]。/C₁(C₂)ɔ/ の形の音節では、わずかに母音が長められる。その他の形の音節では、母音の長めを伴うことはない。/ba-la/ <月>, /hɔp/ <胸>

(2) /˩/ : 低降型の声調 [ɛ₁]。この声調を持つ音節では母音の長めを伴う。/C₁(C₂)ɔŋ/ の形の音節においては、他の場合に増して、母音の長めは著しく、それにとまって声調の形も [ɛ₁₁] のようになる。/sə/

11) glottal constriction あるいは constriction glottale に当るものである。

12) 舌の位置を前・後で表わし、高さを高・中・低にわけ、前高と言うのは、舌の位置が前で高いことを表わす。唇の形を張唇と円唇とに分ける。前高の張唇といえ、その母音を発音する際、舌の位置が前で、高く、唇は円められていないことを示す。

<齒>, /mjò/ <サル>, /gòŋ/ <槍>

(3) //: 高昇型の声調 [45]。(2)の場合と同じく母音の長めを伴う。/C₁(C₂)ɔŋ/ の形の音節においては、母音の長めは極めて著しい。但し、/C₁(C₂)um/ の形においては、母音の長めは伴わない。/jɔ-phú/ <青い>, /jɔ-ŋóŋ/ <かたい>, /jɔ-núm/ <短い>

2 アルー村方言とセーンチャイ村方言

2.1. 私はアルー村の他にセーンチャイ村をも、主な調査地として選んだのであるが、これら二つの村で話されている方言は、わずか 10km 足らずしか離れていないにもかかわらず、多少の違いを示している。ここで、これら 2 方言がどのような点で異なっているかということについて、簡単にふれることにする。アルー村方言の音素については今まで述べて来た通りであるが、ここでセーンチャイ村の音節構造を概略的に示し、次いでこれら方言の相異点を見ることにする。これは比較言語学的考察というほどのものではなく、ただ二つの方言の相異点を指摘するだけである。セーンチャイ村方言の音節構造は、アルー村方言のそれと同

T
 $Sy = C_1(C_2) V(C_3)$ で示すことが出来るので、
 以下この式にしたがって述べて行く。

2.2. セーンチャイ村方言の音素：上の式にしたがって簡単に示すと次の諸表の通りである。

(1) C₁- (音節初頭子音) :

		唇	歯	硬口蓋	軟口蓋	その他
閉鎖音	無声	無気 p	t	c	k	
		出気 ph	th	ch	kh	
	有声	無気 b	d	j	g	,
鼻音	有声	無気 m	n	ñ	ŋ	
摩擦音	無声	無気	s	š	x	h
	有声	無気	z		ɣ	
破擦音	無声	無気	ts			
		出気	tsh			
	有声	無気	dz			
Oral Continuant	有声	無気	l	j		

C₁(C₂)- の形としては、/pj-, phj-, bj-, mj-/があり、アルー村方言の場合と同様である。/j/ 以外の要素が -(C₂)- の位置を占めることはなく、-(C₂)- が満たされた場合には、C₁- は両唇子音のいずれかでなければならない。

(2) V (音節中核母音):

	高	中	低	
前舌母音	張唇 i	e	ɛ	
	円唇 ø			
後舌母音	張唇 u	ə	a	
	円唇 u	o	ɔ	
特殊母音				m

(3) -(C₃) (音節末尾子音): これはアルー村方言と同じく、/-j-, -ŋ-, -m/ のみである。-(C₃) が /m/ の場合は -V- は必ず /u, w/ のいずれか、-(C₃) が /ɸ/ の場合は -V- は必ず /a, ɔ/ のいずれか、-(C₃) が /j/ の場合は -V- は必ず /a/ でなければならない。

(4) T (声調類): アルー村方言と同じ様に次の 3 種である。

I. 中平型 (ML) ……声調符号をつけない。

II. 低降型 (LF) ……へで表わす。

III. 高昇型 (HR) ……/ で表わす。

2.3. アルー村方言とセーンチャイ村方言との相異点: これら両方言の相異は、音節初頭子音に関して最も著しく、音節中核母音、末尾子音、声調類については、大した相異点は見られない。したがって、ここでは C₁- の位置を占める音節初頭子音について述べることにする。両方言の音節初頭子音を見ると、セーンチャイ村方言が 28 個、アルー村方言が 23 個となっている。これらのうち、アルー村方言にあってセーンチャイ村方言にないと言うものは存在しない。セーンチャイ村方言の方が 5 個だけ多いわけであるが、これらは具体的には /ts-, tsh-, dz-, z-, š-/ であり、いずれもアルー村方言には見出されないものばかりである。これら 5 個の要素がアルー村方言でいかなる形で現れているかを見て行こう。両方言の初頭子音音素の相異をまとめると、次の図のようになる。なお、多くの例があるのだが、ここでは若干のものに止めておくこととする。

アルー村方言 セーンチャイ村方言

/c-/	/ts-/	 i.
	/c-/	 ii.
/ch-/	/tsh-/	 iii.
	/ch-/	 iv.
/j-/	/dz-/	 v.
	/j-/	 vi.
/j-/	/z-/	 vii.
	/j-/	 viii.
/s-/	/s-/	 ix.
	/š-/	 x.

i. アルー /c-/ : セーンチャイ /ts-/

/co-'ú/	/tso-'ú/	建てる
/cés-'ú/	/tsés-'ú/	渡る
/cè-'ú/	/tsè-'ú/	咆える
/cù-jé/	/tsù-jé/	友達
/cù-nw-xò/	/tsù-nw-xò/	今年
/ja-cə/	/ja-tsə/	スズメ
/mè-cə/	/mè-tsə/	衣服

ii. アルー /c-/ : セーンチャイ /c-/

/jo-cù/	/jo-cù/	つぼみ
/mì-ci/	/mì-ci/	マッチ
/ma-cà/	/ma-cà/	ビン
/í-cù/	/í-cù/	水
/cà-'ú/	/cà-'ú/	料理する
/cà-hm/	/cà-hm/	髪の毛
/cí-hà/	/cí-xà/	鳴きジカ

iii. アルー /ch-/ : セーンチャイ /tsh-/

/dù-chí/	/dù-tshí/	根
/chə-hà/	/tshə-xà/	人
/jo-chì/	/jo-tshì/	ベルト
/bó-chəŋ/	/bó-tshəŋ/	森
/lè-chì-'ú/	/lè-tshì-'ú/	(布を)洗う
/chò-yo/	/tshò-yo/	いろり
/chò-bì/	/tshò-bì/	水くみ場

iv. アルー /ch-/ : セーンチャイ /ch-/

/mi-ché/	/mi-ché/	ナイフ, 刀
/'a-chó/	/'a-chó/	乳, 甘い物
/'ù-chó/	/'ù-chó/	頭飾り
/ché/	/ché/	米
/chá-chà/	/chá-chà/	小指

v. アルー /j-/ : セーンチャイ /dz-/

/jə-'ú/	/dzə-'ú/	習う
/hà-jé-'ú/	/xà-dzə-'ú/	ツバを吐く
/jù-'ú/	/dzù-'ú/	水を浴びる
/jú-'ú/	/dzú-'ú/	買う
/mì-jà/	/mì-dzà/	火

vi. アルー /j-/ : セーンチャイ /j-/

/'ù-jé-jé-'ú/	/'ù-jé-jé-'ú/	雷が鳴る
/jɔ-'ú/	/jɔ-'ú/	居る
/ja-lé/	/ja-lé/	風
/ji-bà/	/ji-bà/	酒
/ja-cə/	/ja-tsə/	スズメ

vii. アルー /j-/ : セーンチャイ /z-/

/'a-ja/	/'a-za/	ブタ
/jà/	/zà/	子供
/hə-jə/	/hə-zə/	柱
/jà-mi-jà/	/zà-mi-zà/	女・妻
/hà-jú-jà/	/xà-dzú-zà/	男・夫

viii. アルー /j-/ : セーンチャイ /j-/

/jè-'ú/	/jè-'ú/	酔う
/jú-'ú/	/jú-'ú/	取る
/jù-'ú/	/jù-'ú/	眠る
/sà-jò/	/šà-jò/	骨
/jò/	/jò/	腰
/ja-ma/	/ja-ma/	ゾウ

ix. アルー /s-/ : セーンチャイ /s-/

/sùm/	/sùm/	三
/sà-phí/	/sà-phí/	コショウ
/'a-sì/	/'a-sì/	種, 実
/sə/	/sə/	歯
/səŋ/	/səŋ/	つめ
/ma-sà/	/ma-sà/	竹

x. アルー /s-/ : セーンチャイ /š-/

/sà-jí/	/šà-jí/	肉
/sí-'ú/	/ší-'ú/	死ぬ
/jə-sú/	/jə-šú/	黄色い
/jə-sù/	/jə-šù/	新しい

/sùm/ /šùm/ 鉄

/mi-sù/ /mi-šù/ 松

2.4. その他の相異点：上に記したものの他に次のような例が見られる。

i. アルー /h-/ : セーンチャイ /x-/

/ho-cà/	/xo-cà/	ネズミ
---------	---------	-----

/cho-hà/	/tsho-xà/	人
/hà-jú-jà/	/xà-dzú-zà/	男, 夫
/hà-hm̐/	/xà-hm̐/	クマ
/hà-je-jò/	/xà-je-jò/	インコ
ii. アルー /h-/ : セーンチャイ /h-/		
/ho-'ú/	/ho-'ú/	見る
/hò/	/hò/	めし
/jo-hù/	/jo-hù/	大きい
iii. アルー /'-/ : セーンチャイ /'-/		
/'ò-pà/	/'ò-pà/	野菜 (葉)
/'ò-ñó/	/'ò-ñó/	野菜

以上はすべて音節初頭子音に関するもののみである。母音の異なるものとしては <ゾウリ> を表わす単語で /sà-no/ (アルー) : /sè-no/ (セーンチャイ) の1例があるだけである。音節末尾子音あるいは声調類に関しては、両方言の間に相異は認められなかった。

おわりに

アカ語アルー村方言の音素体系について述べて来たが、これは調査ノートを整理する際の第1段階に過ぎない。本稿では音節という範囲内で音素を扱ったわけであるが、更に進んで音節と音節との関係、形態構造、文構造等々を記述して行かねばならない。小さい単位からより大きな単位へと整理・記述して行き、その各段階において徐々に発表して行きたいと思っている。この意味で、本稿は最終報告の第1章、第1節のもとになるものと思っていただきたい。データを整理しているうちに、アカ語はビルマ語とかなり規則的に対応すること、またラフ語、リス語などとは、近いようでありながら、異なった点が多く、かなり特異な言語であることがわかって来た。私の調査は未だ終わったものではなく、最終報告までに、もう一度村にもどることを計画している。アカ語の文法構造の記述、グロサリー、テキストとこの3種を整理し終ってはいじめてアカ語というのはどんな言語であるかがわかるであろう。近い関係にある他の言語との比較研究はその後だと考えている。先にあげた、ラフ諸語、リス語、ビス語などのすべてにわたって詳しい調査を行なうことが必要となって来るだろう。

参考文献

- ここでは、アカ語あるいはアカ族に関する文献すべてをあげることはひかえるが、そのかわり、それらに直接関係なくても、実際に調査を行なうに当って参考にしたものはあげておくことにする。
- Bunchuai Sisawat. *Samsip Chat nai Chiangrai*. Bangkok: 1960.
- Bunchuai Sisawat. *Chau Khau nai Thai*. Bangkok: 1963.
- C. C. S. *Photchananukrom Phasa Phak Nua*. Bangkok: 1956.
- Cornyn, William. *Outline of Burmese Grammar*, Language Dissertation No. 38, Supplement to *Language*. Baltimore: Linguistic Society of America, 1944.
- Hanks, Lucien M. et al. *A Report on Tribal Peoples in Chiangrai Province North of the Mae Kok River*, Bennington-Cornell Anthropological Survey of Hill Tribes in Thailand, Bangkok: The Siam Society, 1964.
- Haas, Mary. *Student's Thai-English Dictionary*. California: Stanford University Press, 1964.
- Hockett, Charles F. *A Course in Modern Linguistics*. New York: The Macmillan Co., 1958.
- LeBar, Frank M. et al. *Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia*. New Haven: HRAF Press, 1964.
- Pike, Kenneth L. *Phonemics, A Technique for Reducing Languages to Writing*. 8th Edition; Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1963.
- Purnell, Herbert C. *A Short Northern Thai-English Dictionary (Thai Yuan)*. Chiangmai: Overseas Missionary Fellowship, 1963.
- Ratchabanditsathan. *Saranukrom Thai*. Vol. 2, Bangkok: 1958.
- Seri Atchasal. *Sip-ha Phau nai Thai*. Bangkok: 1963.
- Suraphong Bunnak. *Chaukhau*. Bangkok: 1961.
- Young, Gordon. *The Hill Tribes of Northern Thailand*, Bangkok: The Siam Society, 1962.